

父と子のモンマルトル組曲

—絵画《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》（1876年、オルセー美術館）と

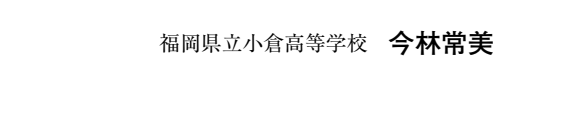
映画『フレンチ・カンカン』（1954年、フランス）をつなぐもの—



■ **1. なぜムーラン（風車小屋）なのか** ■

今回は、パリ北方のモンマルトルを舞台にした絵画と映画を取り上げてみたい。絵画の方は印象派を代表する画家オーギュスト＝ルノワールの《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》、映画の方はその次男で映画監督のジャン＝ルノワールが1889年のムーラン・ルージュ開設までの物語を映像化した『フレンチ・カンカン』である。両者に共通する具象物はモンマルトルの丘にかつて多数存在したといわれるムーランである。風が強くないと風車は回らない。パリ随一の高さ（約130m）を誇るこの丘は、中世以来粉挽きのできる風車小屋地帯として人々の生活を利してきた場所であり、殉教者を祀る聖地でもあった。この丘に仕事の減った粉挽きのドブレ親子が四角で平たい屋根の木造の納屋を緑色に塗り替えてダンスホールに改築し、オーケストラ用のひな檀を設けて開設したのが1837年。その後このホールはさらなる改装を加えながら自家製の小麦粉でつくった扁平な焼き菓子＝ギャレットを名物とし、飲んで踊れるスポットとしてパリっ子の人気を博した。日曜・祭日の天気の良い日には庭も開放され、人々は樹陰で真夜中まで踊り続けることができた。人間讃歌・生命讃歌を木洩れ日の色彩のシンフォニーによって描いた「印象派絵画の金字塔」（NHK『オルセー美術館2』）ともされる《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》は、その賑わいの一瞬を描きとめたものである。この賑わいの楽しさと喜びを貴族やブルジョワの人々にもあじわってもらおうと1889年に“赤い風車小屋”を広告塔にして開設されたのが、ジャン監督が『フレンチ・カンカン』で取り上げた「ムーラン・ルージュ」である。父の絵画を思わせる鮮やかで色彩感あふれる映像は歓楽街・観光地と化したモンマルトルの姿を描いたものといえるだろう。

■ **2. ルノワールと印象派の形成** ■



フランス中部の町リモージュ生まれで、一家の転住に伴ってパリの下町で幼少期を過ごすことになったルノワール少年は13歳で親の薦めもあり、セーヴル焼きの絵付け工房に入門、持ち前の器用さと熱心さでめきめきと腕を上げて、カップにマリー＝アントワネットの肖像を描く作業まで託されるほどになった。しかし、産業革命の波はこの工房にも及び、磁器絵付けの機械化が進む中、ルノワールも仕事を失い、別の仕事で穴埋めをした。この頃、度々訪れたルーヴル美術館で学んだブーシェやワトー、フラゴナールらロココ派画家の装飾的な絵画技法は後の彼の画風にも影響することになった。ルノワールにとって最初の挫折である失業は結果的に彼の人生の大きな転機となり、新たに通い出した美術学校でモネやシスレー、パージュルらに会い、いわゆる“印象派”グループを形成することになるのである。ナポレオン3世の指示でオスマン知事の下、1853年に始まったパリ大改造とともに少年期・青年期を過ごした「印象派」の画家たちが近代化されたパリとそこに住む人々を描くのは当然の成り行きであるが、彼らは日々変化していく街の空気や街を照らし出す光に目を見張った。一方でパリの近代化の裏返しとしての人々の田園志向にも彼らは関心を示し、そのような中で人々に意識された「自然」を彼らは描いた。しかし、彼らが「印象派」として本格的な活動を開始するのは1870年の普仏戦争の敗北と1871年のパリ＝コミューンによる混乱の鎮静化を待たねばならなかった。その関係で延び延びになっていた第1回のグループ展もさらなる歴史の荒波の中で開催された。アメリカに端を発する1873年の大不況は彼らを支援してきた画商デュランにも及び、ルノワールらは自分たちで会社をつくり、絵画の展示から販売までを自らやらなければならなくなった。そうしてようやく1874年、写真家ナ

ダールのアトリエを借りて展覧会が開かれるに至ったのである。この展覧会の正式名称が第1回グループ展「画家、彫刻家、版画家などによる有限会社の展覧会」と称されたのはこのような事情による。展覧会はごうごうたる非難を浴び、その中で発された揶揄の言葉から「印象派」という名称が生まれたことは周知の事実である。

■ **3.《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》の周辺** ■

このあと1875年の作品販売会、そして1876年の第2回印象派展へと彼らの活動は続くが、十分な成果をあげたとはいえないものであった。ただ、ルノワールに関していえば、この間、数名の熱心なパトロンを得るようになり、ルノワールはその収入でモンマルトルのコルトー街に庭つきのアトリエを借りることができた。このアトリエを根城にして戸外スケッチを繰り返し完成された作品の一つが《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》なのである。この作品が印象派絵画の代表作の一つとされるのは何といてもこぼれ落ちる木洩れ日の斑模様を巧みに描いて、ここに集う人々の幸福感を際立たせていることだろう。構図としては、左方斜め上半分が人々の踊る様子、右方斜め下半分が立って歓談したり座って語り合う人々の、二つの場面から成っており、この中に自分の友人やモデルを配置して印象派の基本的制作姿勢である「見たままの直接描写」をルノワールが試みたものとみられている。名前が判明している友人やモデルを拾ってみよう。画面左側、黒いフェルト帽の男はキューバ人画家カルデナス、その相方の女性は通称マルゴ、その左右で踊る男性たちも、特定はできないが、画家仲間のシルヴェクスとコルディ、友人で役人のレストリングスやジャーナリストのロートらである。相方の女性たちは、根拠は不明だが、NHKの人気番組『迷宮美術館』によると「流行のタンバル帽子のプレゼント」を条件に集めた娘たちといわれている。画面中央下、ベンチに座る女性はエステル、その右肩に手を置いているのが姉のジャンヌで二人ともモンマルトルで“お針子”をしている素人モデルである。ふだんお針子や洗濯女として働いている若い娘にとってモデルの仕事は比較的割の良い仕事だったのである。右横で彼女たちに話しかけている男性は画家

仲間のラミ、さらにその向かい側でシルクハットを被りタバコを口に加えようとしているのが同じく画家のグヌート、その横で何かメモをしているのが親友のリヴィエールである。当時、身持ちの良い女性の必需品とされた帽子をここに登場する娘たちはほとんど被っていないが、ルノワールはあくまで庶民の活気あふれる女性たちをここでは描きたかったからではないかといわれている。ラミとリヴィエールの座るテーブルの前にある飲み物は当時人気があったザクロのグレナディン・シロップと比定されている。野外ホール奥にはオーケストラが楽曲を奏でており、踊りの様子からウィンナ・ワルツではないかともいわれている。日曜・祭日のこのホールは夕方、ガス灯が煌々と輝いて、昼とはまた趣の違うダンスの光景がみられたに違いない（同じ頃、アメリカのエディソンは白熱電灯を発明しており、時代は電気時代へと進みつつあった）。キューバ人画家と踊るマルゴのドレスは後ろをやや高くしたバックススタイルで、日本のいわゆる鹿鳴館時代に貴婦人たちが着たドレスもこれと同様のものであった。《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》はルノワールを取り巻く仲間たちの“青春讃歌”であり、集団肖像画的意図もあったのではないかと思われる。

■ **4. 映画シーンの教材化** ■

まず冒頭の“女王ローラ”の踊りが、当時のヨーロッパでみられた異国趣味＝オリエンタリズムを感じさせる場面であることを生徒には指摘したい。税の強制執行に來た執達吏に対して、このローラが愛人で興行主でもあったダングラールのために述べた言葉が奮っている。「ブーランジェ將軍と知り合いなのよ」。いうまでもなく、初期のフランス第3共和政政府を揺さぶったあのクーデタ未遂事件の主役である。ムーラン・ルージュが開園するのが1889年、『フレンチ・カンカン』はその前年の準備段階を描いたものと考えられるから、ちょうどフランス中にブーランジェ・ブームが沸き起こっている頃であり、ジャン監督もこの辺の時代性をよく考えて映画シーンをつくっていることがわかる。生徒にこの一言の意味を問うことは当時の時代状況を理解させる良質の教材となりうるだろう。